

本来あるべき環境をなくし  
真の意味を失ったモノを収容することが、  
ミュージアムのもつ意義である。  
祀られたモノと対話し、  
永遠の命を与える。死と再生の場、  
墓場としてのミュージアムこそ  
生き続けるといえよう。

宮下 規久朗 (みやした きくろう)

神戸大学助教授

真価を失う切花展示

初めての土地を訪れたとき、博物館や美術館があれば必ず行くことになる。そこに行けば、その地の文化や歴史についての概略を手早くつかむことができるからだ。しかも、ガイドブックのような表面的な情報にとどまらず、展示されたモノをとおしてもっと本質的な知識を与えられることもある。ミュージアムの真価は、情報よりも本物のモノに出会わせてくれることにある。ミュージアムとは、博物館であれ美術館であれ記念館であれ動物園であれ、モノを見せる装置である。情報をえる

ミュージアムは意外に少ない、というか重要ではない、というところである。ミュージアムに収められていない遺跡、建築、美術であふれており、それがこの国の文化的豊かさを証しているように思われる。ミュージアムを必要としないということとは、モノが本来の環境で生きているということだ。「街自体が博物館」という意匠をよく聞か、街が歴史的なモノや環境をよく保存しているということであり、同時に、街が時代に乗り遅れて現代的な活力を失っているということでもある。

モノが、保存や展示のために博物館・美術館に送られるのは仕方ない場合があるが、モノ本来の場所に残して見せてくれる方が望ましい。

たとえば宗教美術の場合、保存や防犯のために美術館に移され、収蔵・修復されて展示されることが多いが、本来の場所である教会で見ることができると見える。美術館の方が照明も明るく、きちんとしたキャプションもあって他の展示品との関係から美術史的な位置づけもよくわかる。一方、教会の祭壇に飾られている絵は薄暗くよく見えず、キャプションも説明もないが、その場合の方が観者に雄弁に語りかけてくれるのは間違いない。香が立ち込め、聖歌が流れ、老婦人が一心に祈る薄暗い宗教空間にあつてこそ、それは生きるものである。美術館に収蔵・展示された宗教美術は、祈りの対象という本来の文脈を剝奪されて美術史や文化史の体系に無理に組み込まれた一種の標本になってしまっているのだ。しかも、画家は通常、作品がどのよう



ナポリ街頭にできた教会案内板  
「美術の道」と称して重要な教会をめぐる  
ルートが地図で示されている



美術館として整備された教会  
カラヴァッジョの傑作《慈悲の七つの行い》(1606-07)。  
ナポリ、ピオ・モンテ・アラ・ミゼリコリア聖堂内部



祈りの対象である作品  
パツィステッロ・カラツォ口  
の《無原罪のお宿り》(1607)の前で、  
フランチェスコ会の修道士たちが  
朝の礼拝をする。  
ナポリ、サンタ・マリア・アラ・ステラ  
聖堂内部

にしても、モノと対面することは、書物や映像からえられるとは違う臨場感とある種の緊張感を伴ったものだ。  
しかし、そういったモノも本来の力を奪われて、いわば無菌化されていることが多い。モノは、当初それが置かれていた環境や文脈から切り離して移送され、ミュージアムに収蔵され展示されることによって、ミュージアム独自の文脈に組み込まれる。そして観客はその文脈に沿ってモノを見ることを強いられる。ミュージアムの文脈とは、その地域の歴史や美術史、民族誌や自然観といった、西洋の近代的な価値観に基づいた思想である。展示されたモノは、こうした文脈のなかで輝くこともあれば、本来もつた豊かな意味を喪失して萎縮することもある。つまりミュージアムとは、野原で咲いている花を切りとってきて枯れないように保存処置を施し、分類にしたがって展示するような施設にほかならない。近年注目を集める世界遺産のように、広大な地域全体をミュージアム化させて当初の場所でモノを見せる試みが増えてきているのは、そうした切花展示への反省からであろう。

本来の文脈で見せる

わたしは仕事の都合上しばしばイタリアに行くが、いつも感じるのは、美術鑑賞の本拠地と思われているかの国では、ミュージアムは意外に少ない、というか重要ではない、というところである。ミュージアムに収められていない遺跡、建築、美術であふれており、それがこの国の文化的豊かさを証しているように思われる。ミュージアムを必要としないということとは、モノが本来の環境で生きているということだ。「街自体が博物館」という意匠をよく聞か、街が歴史的なモノや環境をよく保存しているということであり、同時に、街が時代に乗り遅れて現代的な活力を失っているということでもある。

教会や遺跡のミュージアム化

イタリアでも最近では、祈りの場である教会が美術鑑賞の重要なスポットであることを認識し始めたのか、教会自体をミュージアムに再編成する傾向が進んでいる。多くがすでに教会の機能を果たさなくなつたものだが、入場料をとって拝観させるのだ。当初設置された環境のなかで作品を見ることができると、ミュージアムのなかで見るとはよいが、祈りの場という機能を喪失したため、香や聖歌や祈る人の姿などはなく、何かが足りないように感じられる。ただ、開館時間もはつきりし、計画的に見学できるので旅行者にとってはありがたい。先日ナポリを訪れたのだが、いくつもの教会が整備されてミュージアム化されており、道案内の看板まであった。かつてのわがりにくさと観光客をねはつてるような無表情さを思い起こすと、隔世の感があった。しかも昔から何度訪れても閉まっていた教会ばかりであり、今回六度目にしてやっと見ることできた教会もあって嬉しかった。

保存や防犯上の理由で本来の文脈に置いておくのが無理で、どうしてもミュージアムに移送する必要がある場合には、

表紙モノ語り

サンニ・ヤカーの仮面

仮面(標本番号H93093、高さ/26.0cm 幅/24.5cm 奥行/27.8cm)

鈴木 正崇 (すずき まさたか)

慶應義塾大学教授

ムを建てたとき、内部をハンテオンに模した空間としたのは、それが美術作品の霊廟であるという認識からであった。

近年、各種イベントやミュージアムシヨップ、レストランなどによってミュージアムを開放して親しませよとする試みがさかんである。それは、ミュージアムを都市の文脈に適合させることであって、大都市にあるミュージアムはその方向で活動したらよいだろう。しかし、あらゆるミュージアムがその方向を目指す必要はないと思う。デパートのように騒がしくなることがミュージアムの活性化につながる

スリランカのシンハラ人の多くは、上座部仏教徒であるが、さまざまな神霊や悪霊の存在を信じている。一般に、人びとは病気になる、西洋医学の病院で診断と治療を受けるが、同時に伝統医療であるアール・ウエーダの医師にもかかる。この双方の働き目があるわけではない場合には、神霊の罰に当たったことや、悪霊(ヤカー)や死霊(ラレー)がとり憑く障り(ドーサ)が原因として疑われ、神霊との交渉をおこなうカブマハッタや、悪霊を祓うヤカドゥラーなどの職能者に相談に行く。特に、南西部では、病因が悪霊の障りと判断されると、仮面を用いた悪霊祓いの病氣治療がおこなわれる。

表紙の写真は、悪霊の一種のサンニ・ヤカーの仮面で、一八種類の病状をもつ悪霊のひとつとされる。引き起こされる病氣(ローガ)



患、精神の乱れなどがあり、一八種類の病状のひとつを仮面であらわしている。悪霊祓い

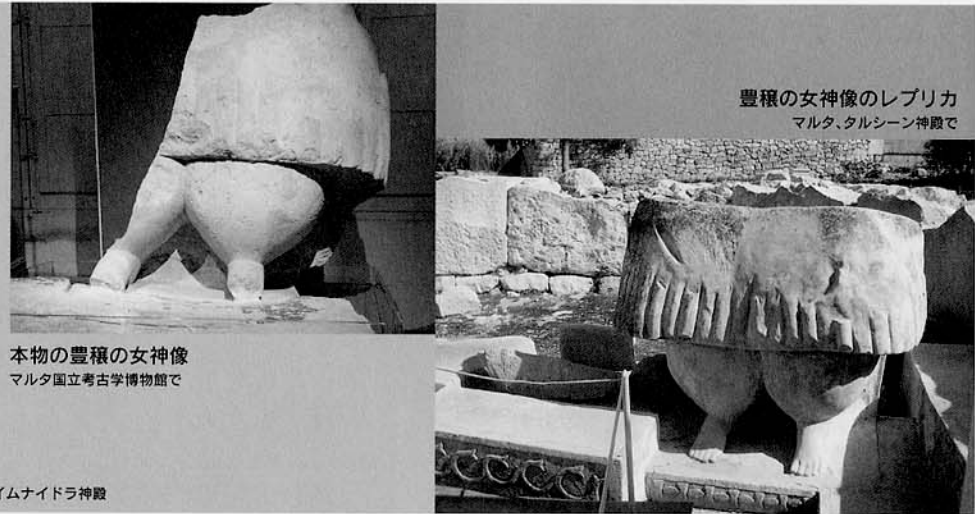
には、腹痛、寒寒、高熱、眼病、喉の痛み、手足の麻痺、骨の痛み、目と耳の衰弱、皮膚の疾

では、ヤカドゥラーが異なる表情の仮面を被って、依頼人の患者の前に次々に登場し、自分の病状を示し、軽口を叩き、食べ物を患者からもらい、患者の身体から離れていく様子を演じる。笑いとユーモアを通じて精神が解放されて人びとの絆が結び直される。悪霊の障りは、実際には心の病が多く、特にタニカマ(孤独な状態)で起こるとされ、女性の患者が大半を占める。

近代化が急速に進むなかで人びとの抱える問題も多様化している。神霊や悪霊との交渉能力をもつ人びとも、世襲による伝統的な儀礼をおこなう者だけでなく、アールータ・カブマハッタと称する仏教の解釈に合わせた儀礼を再編成し、神懸り能力を誇示する者も出現した。現代の癒しの専門家としてあらたな変貌を遂げようとしている。

本来の場所にレプリカを置いておくというやり方もよいだろう。屋外の遺跡などで一般的におこなわれている手法だが、現在の技術によるレプリカは精巧なので指摘されなければわからないものもある。

マルタ島の世界遺産である巨石遺跡をめくったとき、神殿の内部に豊穡の女神像を見つけた。その力強いフォルムや生命力に打たれたことがあった。しかし、その後、首都ヴァレッタにあるマルタ国立考古学博物館を訪れると、同じ女神像がケースのなかに展示してあり、先ほど見たのがレプリカだったのに気づかされた。しかも遺跡のなかにあったものはかなり復元されており、本物はもっと損傷が激しいものであることもわかった。しかし、裏切られたという気持ちはなく、たとえレプリカであっても、あの遺跡のなかで、自然環境のなかでその像を見ることでできてよかったと思つたものである。大事なのは、ミュージアムの文脈だけでモノを見ないで、当初の環境のなかでとらえることである。もつとも、マルタの巨石神殿群は土中から掘り起こされた遺跡であり、現在はいずれも屋外ミュージアムとして入場料をとって見せるようになってきている。にもかかわらず、そしてそのなかの彫像や祭壇のいくつかがレプリカに置き換えられていようと、青い海を見下ろし、黄色い花が咲き乱れる自然も含めて環境がそのまま保存されているのが貴重なことである。親切な解説パネルとともに出土品の多くが展示されている園



豊穡の女神像のレプリカ  
マルタ、タルシーン神殿で

本物の豊穡の女神像  
マルタ国立考古学博物館で

マルタ、イムナイドラ神殿

がると考えるのは間違っている。そんなうわへの活性化よりも、死者の声に耳を傾けることができるよう、静謐な空間を作り出すほうが大事である。墓場にはそれにながわしい澄み切った静謐な空気が要求される。モノの霊場としての荘厳な雰囲気、つまり宗教性にも似たものこそが、ミュージアムに永続的な生命を与えるのではなからうか。ミュージアムはもう終わったのではないか、という疑念をよく聞くが、ある種の廃墟が美しいように、終わったものだからこそ生き続けると言えよう。

考古学博物館は、こうした遺跡を補完する資料庫にして情報センターにすぎない。

モノのための静謐な空間

では、一般的な箱もののミュージアムは保存・修復という守りの側面以外の意味はないものだろうか。ミュージアムは、本来の環境が失われてしまつたモノや、出所不明のモノを収容する役割を担っている。故郷を喪失し、当初の意味を失つたモノはミュージアムの展示室にこそ安住の地を見出すのだ。博物館行き(というには役に立たぬ骨董を指すのに用いるが、「博物館はモノの墓場である」という言いまわしもよく聞く。ミュージアムにあるモノは死物であり、ミュージアムは墓場にはかならないが、それゆえに独特の雰囲気(アトモスフィア)が生まれるのである。墓場や霊廟には、宗教施設特有の厳肅な空気と緊張感が漂っているが、よいミュージアムには必ずそれがあがる。墓場は死者と対話し瞑想する場であるが、ミュージアムも死んだモノを弔うことから、墓場としての空気が生じ、祀られたモノがそこで永遠の命をえるといえないだろうか。そもそも芸術は死と結び付いており、あらゆる芸術作品は死を扱ったものと見ることができる。また、芸術とは畢竟、宗教と等しいものであるため、博物館や美術館が墓場に類似するのは当然なのである。一八三〇年、ヘルリンでシンケルがヨーロッパ最初の美術館のひとつアルテス・ムゼウ